

三重県四日市から来ました若林真奈美です。

早いもので第3子の息子「くるみ」を亡くして24年になります。

いまだに、生きていたらいま何しているのかな？と思っています。

たくさんの方の前で息子のことを話すのは9年ぶりです。

久しぶりに、あの日のことを話させていただきます。

私が息子「くるみ」を抱っこしたのは、出産した翌日でした。ほっぺがふわふわで、とてもかわいい子でした。でも、いままでに経験したことのない冷たさでした。この子が亡くなっているということが現実でわかりました。

色が白くて天使みたいでした。きっと、天使だったからすぐに天国に行ったのかなと思いました。

24年前の9月26日の朝に破水しました。兄弟が同じ誕生日になるなんてと、胸を躍らせて産婦人科に行きました。

しかし、「陣痛が来ていないから、このまま様子を見ましょう。自宅で安静にしてください。」と抗生物質を処方され帰宅しました。不安な時間を自宅で過ごし、翌日の夜10時に陣痛が15分間隔になったので入院しました。

入院はしたものの、翌28日の朝に「陣痛が弱い、促進剤を投与しよう。疲れているから無痛分娩にしよう。」と言われ、8時51分 硬膜外麻酔施行。1%カルボカインを15ml注入。カテーテル挿入し持続硬膜外麻酔をしました。

9時1分 分娩監視装置を付けて薬の説明のないまま5%ブドウ糖 250mlの中にオキシトシン5単位を10ml/hで点滴開始。

10分後に陣痛周期は5分から6分と変わらないため、20ml/hに増量されました。

オキシトシン製剤の用法・用量は添付文書では、5%のブドウ糖 500mLにオキシトシン5単位を入れて1~2mIU/hで開始するようになっていましたが、5%のブドウ糖 250mlのボトルにオキシトシン5単位を入れた場合、3~6ml/hとなりますので、私の場合は大量で開始されたことになり、30分以上の間隔で増量しなければならないのに、わずか13分で増量していました。

無痛分娩は、痛みがないものだと思っていましたが、しばらくすると痛みが襲ってきました。

無痛分娩にすると、胎児を娩出する力が弱くなるということは後で知りましたが、そのような説明もなく、硬膜外麻酔をされました。

3度目のお産なので、1・2回目と比べ「本当にこれでいいの？」という不安がたくさんありました。しかし、医師のすることを疑うことはありませんでした。

10時52分 硬膜外麻酔施行後2時間経過、陣痛発作時に痛みを訴えるため、0.25%マーカイン7cc追加。

12時近くになり「なかなか生まれないね。手伝おう。」と医師は、試験的吸引を4回＋クリステル圧出法を試みましたが、児頭の下降がありませんでした。

12時36分、陣痛周期2分30秒～3分。陣痛発作50秒。

12時53分、0.25%マーカイン7ccを追加しました。

その後医師は「このまま様子を見よう。」と病院の3階にある自宅に戻り、その後、ベテランと言うにはあまりにも高齢である80歳の助産師に任せて車で40分以上はかかる場所に外出されたので私は不安ばかりが先行していきました。

後にカルテを証拠保全したところ、13時30分にさざ波様子宮収縮が始まり、14時30分、陣痛は次第に減弱、胎児心拍は150～160で基線細変動が判読できない波形となっていました。

他の妊婦が入院して、先生を呼び出しますがなかなか帰ってきません。

私は主人に「先生が来たら帝王切開をお願いしてね。」と何度も何度も言っていました。

医師が戻り、15時07分診察 陣痛周期1分30秒、陣痛発作45秒

排臨状態のまま分娩が停止しているため、再度吸引分娩2回 クリステル圧出法を試みましたが児頭は下降しませんでした。

「帝王切開にしてください。もうだめです。」と懇願しましたが、「それもいいかも知れないね。」と言われました。3人目なのでいままでと違う何かを感じていました。

15時52分、帝王切開が決まりました。書類に署名捺印をし、手術の準備のために、分娩監視装置が外されました。私の記憶はここからありません。

16時50分、帝王切開手術開始。

17時02分、胎児娩出。

意識が戻ったのは、看護師さんが「先生が間違っどこか切ったのかと思ったわ。すごい出血でびっくりしたよね。」の声でした。

その時、私は手術台の上にはいましたが、血圧の機械はずっと警告音を発し続けていました。

お腹を開けると血の海で、医師は私の処置にかかりきり、息子は救急車で市立病院に搬送されたということでした。

しばらくすると、泣きはらした目で主人が手術室にやってきました。

「胎盤早期剥離による子宮内胎児死亡」これが息子が亡くなった原因だと言われました。

医師が「これはね、お母さんが助かっただけでも運がいいんだよ。本当に良かったよ。」この言葉で片付けられてしまいましたが、私の命も危なかったのがわかりました。輸血でなんとか命を取り留めました。

ここから、私と私の心との戦いが始まりました。

その頃、同じ産婦人科で2件の分娩事故が起こっていることを知り、二人の子どもたちのためにも、なんとか立ち直りたいと必死でした。

もしかして医療事故？という気持ちが抑えきれず、図書館に行きいろいろな本を読みました。

そこで「陣痛促進剤による被害を考える会」の出元さんを知り、会に入会しました。

出元さんにいろいろ教えて頂き、私が前に進む準備が始まりました。

カルテを保全すると、色々なことがわかりました。

分娩監視記録を見ると、陣痛促進剤投与から、4時間半後の13時半ころから帝王切開を決定するまでの2時間、10分間に、5回から7回の過強陣痛が連続し、さざ波と呼ばれる、胎盤剥離を疑う子宮収縮曲線も持続しており、素人の私でさえもおかしい部分がありました

いくら監視装置をつけていても、医師が不在でしたし、グラフが読めなければ意味がありません。

お腹を何度も圧迫したのと、過強陣痛で少しずつ胎盤がはがれて行ったと思われます。

手術決定から帝王切開まで1時間もかかり、その間、分娩監視装置が外されたことで胎児の監視がされず、くるみは、死産で生まれ、私は、直後からショック状態となり、脈拍は頻脈となり血圧は60～70くらいまで低下しました。

しきゅうこうへき

手術で、子宮後壁と胎児にはさまれるような形で1000gの凝血が見られたことで、「常位胎盤早期剥離」と診断されました。

陣痛促進剤は、人によって、感受性が大きく違うということ。きちんとした監視の元、きちんとした判断の出来る人がそばについて使うべきものです。

最近は無痛分娩を選択する人も多くなっていますが、麻酔の影響で本来の陣痛が感じられないことを理解し、十分な監視が出来る医療機関を選んでいただきたいと思います。

あつという間の24年間でした。久しぶりにあの日のことを思い出しました。

私たちのような被害者の声を聴いていただき、これからも薬害の被害者が出ることを祈るばかりです。

ご清聴ありがとうございました。

若林真奈美

<添付資料>

アトニーO 添付文書 2020年12月

[https://www.aska-](https://www.aska-pharma.co.jp/iryoyiyaku/news/filedownload.php?name=2dc7ba57c36478d4ff3d746fdf2c8152.pdf)

[pharma.co.jp/iryoyiyaku/news/filedownload.php?name=2dc7ba57c36478d4ff3d746fdf2c8152.pdf](https://www.aska-pharma.co.jp/iryoyiyaku/news/filedownload.php?name=2dc7ba57c36478d4ff3d746fdf2c8152.pdf)

患者説明資料 出産されるお母さん ご家族の方へ アトニーO

[https://www.aska-](https://www.aska-pharma.co.jp/iryoyiyaku/news/filedownload.php?name=1627d6bb95ebb420f58e04aa4453925e.pdf)

[pharma.co.jp/iryoyiyaku/news/filedownload.php?name=1627d6bb95ebb420f58e04aa4453925e.pdf](https://www.aska-pharma.co.jp/iryoyiyaku/news/filedownload.php?name=1627d6bb95ebb420f58e04aa4453925e.pdf)



9 7:30



9 29 '00



